

馬場公彦 先生/马场公彦 先生

北京大学外国語学院 外国人専門家/北京大学外国语学院 外籍专家（インタビュー当時/采访时）

岩波書店 元編集部部长/（日本）岩波书店 原总编辑

日時：2022 年 3 月 15 日

采访时间：2022 年 3 月 15 日

場所：北京市内

采访地点：北京市内

使用言語：日本語

使用语言：日文

聞き手：野口裕子

采访者：野口裕子

（国際交流基金北京日本文化センター）

（北京日本文化中心（日本国際交流基金会））

【目次】

1. 中国との出会いと関わり
 - （1）関心の芽生えと学生時代
 - （2）編集者として
2. 「知の共同体」について
3. 現在における知的交流の意義
4. 中国の日本研究について
 - （1）現状について
 - （2）今後への期待

【目录】

1. 相遇相连中国
 - （1）兴趣的萌芽与学生时代
 - （2）作为编辑
2. 关于“中日知识共同体”
3. 知识交流的意义于现在
4. 中国的日本研究
 - （1）现状
 - （2）对今后的期待

【本文】

1. 中国との出会いと関わり/相遇相连中国

（1）関心の芽生えと学生時代/兴趣的萌芽与学生时代

中国との出会いは高校時代にさかのぼります。私は長野県の出身で、長野県は戦時中の満蒙開拓団で渡った人が多かったところで、日中戦争と深い関係があるところだったんです。それと、朝日新聞の社会部の記者で本多勝一さんという人がいて、彼は私の出身の伊那とは同郷だったんですね。で、高校時代に彼のルポルタージュや冒険記ものをよく読んでました。彼は1972年に『中国の旅』ⁱという、日中戦争の被害者を中国のほぼ全土に涉って取材して書いた記事を朝日新聞に連載していました。それまでは先の戦争を、開拓団もそうですが、被害者の視点からとらえていたのが、本多さんの『中国の旅』を通して日本軍の加害性を思い知らされたんです。そんなこともあって中国に関心を持ちました。

高校時代は血気盛んな時期で、社会主義とかアナキズムに関心があって、いろいろ読んでみますと、西洋のものよりは中国革命の方が自分の身にぴったり合っているような感覚でした。長野の農村にいたせいかもしれません。それで毛沢東の『実践論・矛盾論』や『文藝講話』なんかを岩波文庫版で読んでました。高校3年生の1976年の9月9日のことでした。ちょうど受験の時期で、勉強しながらラジオを聴いていた「毛沢東死去」というニュースが流れて、非常にびっくりした覚えがあります。自分と現代史がつながるような感覚に襲われて、大学に行ったら中国に関わることを勉強したいなとそのとき思ったん

ですね。

北海道大学に入学し、学部では中国哲学を専攻しました。特に先秦諸子のバラエティに富んだ思想が好きで、卒論では孫子を研究しました。その当時、1977、8年は文革が終わってまだ間もないところで、学界はイデオロギー的に硬い研究ばかりでした。私の指導教官からは、当時、「現代中国の研究は学術的価値がないから参照するな」と諭されましたが、私はこっさり、当時中国で発行された『文物』や『考古』といった学術誌を北大図書室で読んでました。それで、現代中国での研究を何か自分の卒業論文でいかにせるような切り口はないかなと思って、当時出土した文献の研究をしました。中国で発掘されたテキストを中国の学者が整理、解説し、解釈を加えたものは、これまで通行している古典作品とは文字に異動がありますし、またそれまで散逸していたものや新発見のものもあるので、読んでおかざるを得ないんです。

(2) 編集者として/作为编辑

学部を卒業した後はすぐに大学院に進学し、修士号を取ってから、1983年に東方書店に入社しました。東方書店は中国で発行された書籍を輸入して、主に日本の中国研究者に営業し、販売するのが主な業務内容です。私は中国関係の本を編集出版する部門に配属されました。東方書店の店舗には中国で出版された中文書が販売用に並んでいますが、ちょうどその頃から、中国の出版界に非常に活気が出てきたんです。当時は改革開放政策の潮流が学界や思想界に浸透してきた頃で、対外開放したとたんに西洋のモダンとポストモダンの思想が一挙に入って来たような具合でした。外から自分たちの国はどう見えるのか、遅れた部分をどう立て直すか、自分たちの歴史を外からの尺度でどう見直すかというような本がたくさん出版されました。当時は出版界の活況は「文化熱」って呼ばれていました。毎日、私は昼休みにそういった新刊書を東方書店で立ち読みしていました。ですけど、結局、日本の出版業界でその「文化熱」を反映するような翻訳出版の例はたいへん乏しかったですね。当時、日本で翻訳出版されたものと言えば、金観涛の『在歴史的表象背後——对中国封建社会超稳定結構的探索』(1983年、四川人民出版社)の翻訳ⁱⁱと、李沢厚の3冊の著作に集められた数本の論文を採録し、翻訳した『中国の文化心理構造』ⁱⁱⁱくらいしか思い浮かばないです。

その後1989年に岩波書店に転職し、そこでも編集業務を続けました。日本の中国研究者が研究したものではなくて、現代中国での成果を翻訳して、日本の出版業界に普及させるような編集を手掛けてみたいと思っていました。最初に配属されたのは学術色の濃い月刊誌の『思想』でした。1990年には、溝口雄三先生が中心になられた「儒教とアジア社会」というぶ厚い特集が出されましたが、その編集担当もしました。溝口先生はそれまでの伝統的な中国研究とは違って、儒教を思想史ではなくて社会史と関連付けるとか、あるいは中国だけではなく韓国とか日本、それからベトナムの儒教の受容史を比較するとか、非常に面白い視点を出してきました。

そのあと私は1995年に月刊誌の『世界』という時事的な総合雑誌の方に転属になりました。そこではもっとフットワーク良く編集活動に打ち込むことができました。そこで直接、現代中国の学者に下手くそな中国語でメールを書いて、原稿を頼んでました。そういう形で書いていただいたのが、例えば陳平原、戴晴、劉賓雁、鄭義、陳思和、金観涛、劉青峰、王曉明、何博伝、金春明、蕭延中、王少普、王輯思、

汪暉、芒克、北島、莫言、孫歌、錢理群、胡鞍鋼といった錚々たる学者や作家の方がたでした。そういった人たちに直接依頼をして、未発表の書下ろしの原稿をいただいて、適当な日本の翻訳者を探して翻訳して、『世界』に載せるというようなことをやりました。

中国で日本学を専攻して教育や研究に従事している人の多くは、日本での留学経験があったり日本の大学の学位をとったりした人が多いわけで、日本の出版業界等々で自分の業績が日本で認知されるってことは、非常に名誉なことです。また中国国内で活躍されている研究者の方がたも、『思想』や『世界』のような雑誌からの依頼があれば、意気に感じて、また比較的自由的な立場から書けるということで、素晴らしい論文を書いてくださいました。

雑誌担当のあと、再び、単行本の部署に戻りました。そこで単行本の形で中国関係のものをいくつか手がけて、現代中国の学者の書いたものを翻訳して単行本で出すということを意識してやってきました。1990年代から2010年代のあいだ、岩波で出版された中国語の翻訳書はほとんど私が企画編集しましたね。

それとは別に、日本にいる在日中国人学者のものもいくつか関わらせていただきました。それまで出版業界で、現代中国はおろか現代アジアからの翻訳書は、現代文学のベストセラーや話題書を除けばほとんどありませんでした。

私が関わらせていただいた最初のもは嚴安生先生の『日本留学精神史』^{iv}で、1991年のことでした。嚴先生は1979年に国交正常化後最初の国費留学生として東京大学の比較文学比較文化専攻に留学なさいました。それまで近代留学生の歴史となると、実藤恵秀先生の『中国人日本留学史』^vくらいしかまとまった研究書がありませんでした。それもしか中国の方がなさるということで、大変興味深く読みました。彼の所属した東大駒場の比較文学比較文化（研究室）には、嚴先生のように中国ないし韓国からの留学生が文化・文学の研究をされて、日本語で発表するという伝統がありましたね。日本における中国研究、あるいは日中文学比較研究のニューウェーブみたいなことがあった。その最初が嚴先生で、平川祐弘先生、小堀桂一郎先生、芳賀徹先生などが「導師（ダオシー）」、つまり指導教授です。彼らからのご推薦を受けて嚴先生を紹介いただいて、出させていただいたんです。張競さんの『近代中国と「恋愛」の発見』^{vi}とか、劉岸偉さんの『小泉八雲と近代中国』^{vii}とかも出しました。嚴先生は大佛次郎賞、張先生はサントリー学芸賞を授与され、学術界、出版界にいい刺激を与えたんじゃないかと思ってます。というのは、それまで日本は、史学でも、文学においても思想においても、日本独特の漢学・中国学の伝統があって、中国学を国内で自家生産するサイクルがすでにできていたわけですね。今度は外から中国学の学知を積極的に導入することによって、日本の学術界、読書界の視界が開かれるきっかけの一つになったんです。

他に私が手掛けたのは孫歌さんとか汪暉さんとか、主に中国国内で活動されている学術系の著者です。彼らの研究はそれまで日本の学術界、読書界でほとんど紹介されてきませんでした。

2. 「知の共同体」について/关于“中日知识共同体”

これは先ほど言った溝口先生とのご縁がきっかけです。『世界』編集部におりました当時、溝口先生は北京日本学研究中心の日本側主任をなさっていて、1998年の3月にたまたま北京に出張した機会に溝口先生から「会わせたい人がいる」と言われてお会いしたのが孫歌さん（中国社会科学院文学研究所）でした。お二人で今、「日中・知の共同体」という活動をしているんだというご説明を受けましたが、

実態はその時はよくつかめませんでした。孫歌さんはもちろん日本語堪能なんですけど、通常の日本研究者とはちょっと違うタイプで、それまでは丸山眞男のことは中国のいろいろな方が注目なさっていましたが、孫歌さんは中国のことや竹内好のことを話題にされていました。私も竹内はよく読んでいましたから、大変関心を持ちましたね。発言の背後に切れ味鋭い省察が感じられました。

さらに会ってほしい人がいるということで、黄平（中国社会科学院社会学研究所）と汪暉（中国社会科学院文学研究所）を紹介されました。二人は当時、三聯書店が発行している月刊誌『読書』の編集長を連名で務めていました。王府井通りにある三聯韜奮書店 3 階の喫茶サロンで汪さんと会いますと、すでに論文の用意があるということで論文を託された。確か以前に会ったことがあり、そのときは魯迅の研究者の印象が強かったのですが、三聯書店では現代中国の思想的な課題について話をしていました。天安門事件のあと、中国の思想界は沈滞したムードが漂っていました。その中で彼は魯迅研究者から脱皮して、中国の近現代史の中から、新しい中国のビジョンを模索していこうという気概を感じました。論文は大変スケールの大きなもので、思索の深さと議論の射程の広がりにより深い感銘を受けました。「グローバル化のなかの中国の自己変革をめざして——近代の危機と近代批判のために」という長尺の論文で、帰国後、『世界』（1998 年 10-12 月号）に 3 回で分載しました（砂山幸雄訳）。

「知の共同体」とは要するに何かって言うと、「日本に対してもっと目を向けてほしい」という願望を形にしたものですね。日中の学術的な取り組みとなると、例えば朱子学とか儒学とか、一つの専門領域、あるいはテーマを定めて、日中のそれぞれの学術的蓄積を交換し合うというのが、それまでの学術交流のスタイルだったんですけど、「知の共同体」はそういうものではありませんでした。

中国の自己変革は西洋の方を見ている。西洋の近代を中国にどう取り入れるか、移入するか、っていうところにばかり関心を持っていて、日本は素通りされていました。孫歌さんは竹内を糸口にして中国の近代をもう一度考えなおそうとしたんですね。そこで孫歌さんは、日本にも思想資源があるんだということを言っていたわけです。そこから、日中双方の知識人が直面している自国の問題を同じ土俵でぶつけ合おう、日中の間の知の断絶状態に対して目下の直面する課題をめぐって討論をしようということだったわけです。

いわゆるシンポジウムのように、テーマを決めて報告をして、コメントをして、というのとは全然違うスタイルだったんですよ。もちろん、例えば戦争の記憶の問題とかナショナリズムの問題とか、テーマはありましたが、何より大事なことは「出会い」ですよ。しかもそこには、日本研究者もいましたが、いろんな研究者いるわけですよ。例えば農村問題を研究している人とか。メディア関係者も多かったですね。岩波からは『思想』の編集長、『世界』の編集長、私は『世界』の編集部員。参加メンバーの一人の柄谷行人さんは、むしろ批評家として有名ですが、当時は『批評空間』の編集長でもあったわけですよ。それから香港や台湾からも何人かやっぱり雑誌をやっている方。そういった人たちが集って、自由な討論によるサロンのような場にしようというのが目的でしたね。

「知の共同体」は 1997 年から国際交流基金のアジアセンターの事業助成を受けてずっと活動して、結局 6 年続きました。私は 1998 年の 12 月から 2002 年まで、5 年間ずーっと関わらせていただいたんですね。98 年は「東アジアの近代とナショナリズム」というテーマで、99 年度は 2000 年 1 月に北京で「アジア認識と戦後責任」、「戦争と革命」、2000 年度は 8 月に岩波書店で「日中間における報道ギャップ」と

いうテーマでシンポジウムが開かれまして、2002年まで8回ぐらい会合が持たれてました。

メンバーとしては、中国側は孫歌、汪暉、黃平、朱蘇力（北京大学）、梁治平（中国芸術研究院）、羅紅光（中国社会科学院社会学研究所）、賀照田（中国社会科学院文学研究所、『學術思想評論』編集長）、戴錦華（北京大学）、劉雪峰（遼寧大学出版社）、陳燕谷（中国社会科学院文学研究所）、韓少功（『天涯』主編）、劉蘇里（現・万聖書園支配人）など。日本側は、溝口雄三、柄谷行人、小森陽一（東京大学）、板垣雄三（東京経済大学）、濱下武志（東京大学）、和田春樹（東京大学名誉教授）、代田智明（東京大学）、田中寛（大東文化大学）、武藤一羊（ピープルズ・プラン研究所）、伊藤貴之（武蔵大学）、茂木敏夫（東京女子大学）、子安宣邦（大阪大学）、小島毅（岩波書店『思想』全編集長）、岡本厚（岩波書店『世界』編集長）、池上義彦（青土社『現代思想』編集長）、小孫靖（講談社『群像』元編集長）など。香港からは劉健芝（嶺南大学）、羅永生（香港中文大学）、台湾から陳光興（清華大学）、趙剛（東海大学）などの方がたが集まりました。そういった人たちが、乗合バスみたいに乗り降り自由で、どんどん増えて行ったり、まあ下りる人もいますが、そういった形での自由なフォーラム形式でのワークショップのようなことをしてましたね。

続けていくうちに、次第にナショナリズムの問題とか、日中戦争の記憶の問題とかっていうふうに、テーマが絞られていきましたね。僕は『世界』にいましたので、その中でいくつか対談や座談会をやり、誌面に掲載しました。1998年12月、私が初めて参加した時に、北京空港に着いた夜、ホテルでいきなり3時間、柄谷さんと王暉がマルクス主義について議論しました。全くの初対面の二人だったんですけど、マルクス主義という接点において、柄谷さんはマルクス主義の再評価、汪暉はマルクス主義をもう一度中国でどう生かすかっていうような形で、二人、3時間ぶっ通しでやりましたね^{viii}。

それと小森先生は孫歌さんと近代天皇制の問題、近代天皇制におけるタブーの問題を議論して『世界』に載せてました^{ix}、2001年に岩波書店で、孫さんのほか、戴錦華、酒井直樹（コーネル大学）、高橋哲哉（東京大学）らで座談会を開き、「戦争の感情 記憶の壁——どう乗り越えるか」（00年11月号）として発表しました。孫さんにはほかに、「日中戦争 感情と記憶の構図」（2000年4月号）、「思想としての「東史郎」現象——理論と現実の間で」（2001年2月号）、「近代史に向き合う倫理的責任が問われている」（2001年6月号）などを寄稿していただきました。汪暉と孫歌の論文は、のちに企画編集し、孫歌『アジアを語ることのジレンマ——知の共同空間を求めて』（2002年、岩波書店）、汪暉（村田雄二郎・砂山幸雄・小野寺史郎訳）『思想空間としての現代中国』（2006年、岩波書店）として刊行しました。研究成果を蓄積するような会ではなかったんですけど、双方の知識人が一つの問題をめぐる議論をするという運動と、運動を通して得られた議論の成果を雑誌や単行本の形にすることで、日中、香港、台湾のメディアを通して思想界、学術界に普及させるするっていうことは、ある程度できたかなと思います。

と同時に、活動のさなかで非常に印象深かったのは、そうやったサロンをやって、みなで会食をして、終わってから、中国のまだ若い学生さんたちが溝口先生のところに寄って行って話を聞くんですね。溝口先生は、「中国の『二十四史』、私は3回読みました」と前置きをして、中国の歴史っていうのはこうこうです、みたいな話をなさるんです。それで、一生懸命学生たちが耳を傾けて、中国語で質問する姿がまぶしく映りました。当時の中国の学生たちには溝口先生は、学術的にも人間的にも非常に魅力のある人だったでしょうね。ですから、彼の著作集は日本では出てないんですが、中国では8巻で三聯書店が

ら 2011 年から 14 年にかけて出てますが、やっぱりそういったことになって形に現れてますね。私も「知の共同体」のメンバーの伊東貴之さんに編集をお願いして、『中国思想のエッセンス』^{*}という溝口先生の 2 巻本を 2011 年に出させていただきました。これは先生の遺稿集になりました。

3. 現在における知的交流の意義/知识交流的意义于现在

「知の共同体」のような知識交流自体が少なくなっていると思うんです。もちろん共同研究とか共同シンポジウムみたいなことは継続なさってるでしょうけど、「知の共同体」のような、出版業界を巻き込んだ、学術界の学科の壁を越えた交流が、どんどんなくなってると思うんですよ。

今の日本では、新聞、放送、雑誌等々で、中国がものすごい頻度で露出していますけれど、実はその中国情報の情報源のほとんどは日本のメディアなんです。日本の中国研究者が、日本のメディアを通して、中国情報を彼らなりに分析して、評論して発表してるわけです。そこには、じゃあ中国自身はどんなのかっていう「リソース」がないわけです。今、ウクライナでの戦争や台湾海峡危機などを日本のメディアは盛んに報道していますが、情報源はほとんどアメリカですよ。アメリカから見た中国像はというと、「米中対決」を鮮明にしていますが、なにが「鮮明」かという「私たち民主主義」、「むこうは専制主義」という単純な二分法です。その見方が完全に間違っているとは言いませんけれど、違う見方、オルタナティブが全然ないんですよ。ロシアと中国、アメリカと日本を完全に分断してしまう発想は、実はこれは安全保障上一番危ないと思います。

「知の共同体」の経験を踏まえますと、直接対話をすることによって誤解を解く、あるいは新しい情報を入手するっていうことが、やっぱりあったわけですよ。「中国側の誰さんは何っていうだろう」って、直接聞けたわけですよ。そういうルートが、すごくなくなっていますね。中国に対して、直接、話をしたり聞いたりっていうようなルート、「ルート」というとどこか外交論のように聞こえますが、要するに「友達」です。双方に友達がなくなって疎遠になっていくっていうことは、言ってみればお互い疑心暗鬼で、不確実性のリスクの中に身を置いてるのと同じことです。それこそ安全保障上のリスクだという風に思うんですね。やっぱり予防外交っていう意味でも、中国の人たちともっと胸襟を開いて語り合うとか、問題をぶつけ合うとか、そういう場が、もっといろいろ必要であると思います。

僕はここ 2 年半北京で、まあ 1 年は日本でリモートでしたが、暮らしています。やっぱり生活者の目線から見ると、例えばコロナ防疫措置に対する日本人の受け止め方は、「独裁で監視体制で、自由がないからうまくいってる」という風にしか見てないわけですよ。でも、例えば衛生管理のためにごみの分別をやった街は清潔になったし、「健康コード」を見せれば意外と普通に生活できるし、日本のように夜 8 時でレストランが閉まることもないし、生活者目線で見れば、ずいぶん違うんですよ。だけど日本人はそういった生活者目線がないまま、例えば「空は PM2.5 で汚れてる」とか、「バスや地下鉄はうるさくて非衛生」とか、かつてのイメージがまだ払拭されてないと思うんですね。実に簡単なことで、住んでみるとわかることが、日本のメディアフレームを通してみるとかなり違うわけですよ。でもメディアの当事者たちにはなからそういう生活者目線に立とうという意思がない。「だってあそこは独裁国家だから」っていう風にして、そこから一歩足を踏み入れようとしな。そういうようなことが、今、日本のメディアや日本人の中国観に起こっているんじゃないかと思うんですね。

4. 中国の日本研究について/中国的日本研究

(1) 現状について/現状

中国の日本研究自体には、非常に広いすそ野があります。ちょっと昔のデータになるんですけども日本語の専門課程を有する大学だけでも 466 校あって、その数は英語の 935 校に次いで第 2 位で、第 3 位のロシア語 118 校を大きく引き離しています。2012 年現在、日本語学習者は全国に 400 万人近くおり、日本研究の学術専門雑誌は 17 種出ており、2015 年に中国知網 (CNKI) で検索すると「日本」をテーマにした論文は 2 万件を超えているそうです^{xi}。国際的な学術研究、共同研究、共同シンポジウムなどは、コロナの影響で今はあまり活発には開けません、かなり盛んに開かれていました。しかしながらそこでの報告書や、個人や共同研究の成果がモノグラフとして日本語で翻訳出版される機会は、これまで非常に少なかったんです。

例えば中国の方の書いた日本論といえど何を思い浮かべるでしょうか。戴季陶の『日本論』ですか。あれは 1928 年の刊行ですよ。それ以降、人口に膾炙したものがなかなか見当たりません。目につくところでは、六興出版から 1990 年に『東アジアの中の日本史』全 13 巻とか、『日中文化交流史叢書』全 10 巻 (大修館書店) くらいしかないです。

六興出版の『東アジアの中の日本史』の良さは、東アジアから見た日本の通史という発想です。それまでも日本の中国学者は、例えば冊封体制とか朝貢貿易システムという中国史の視点から日本史を研究するような研究動向はありました。例えば明代の倭寇、古代史における朝鮮半島の新羅や高句麗との関係といったことになると、日本と直接交流がありますので、当然言及はあるんですけど、基本的には「国史」の枠組が非常に強かった。今では東アジアの中で日本史をとらえなおしてみようという発想が、今の日本史の主流になっています。その元をたどると 1990 年代初頭に中国人の学者が切り開いた功績はあると思います。

そういうわけで、これらの本は出版業界では話題になりましたけど、その後はほとんどないに等しいんですよ。なぜそういう成果が少ないのかというと、第一に日本の日本研究者と編集者が中国語を読めず中国の学術状況に暗いから。第二に、中国の日本研究には非常に素晴らしい研究はあるんですが、日本で流通する情報と学術成果の紹介に終わっているものも多くて、日本の学術界にとってあんまり参照価値がないと思われるから。第三に、中国での出版物のスタイルが日本人の味覚に合わないから、といった理由が挙げられると思います。そもそも中国の出版物は重厚長大に仕上がっていて、翻訳するとなると、学術書ですし、市場性がなかなかないんです。そんなことから、中国における日本関係の書籍の翻訳実績と比べてみると、圧倒的に数量は少なく、中国の日本関係の本が、翻訳されることほとんどない。出版業という産業論からみると、日中間の知識交流は非常にいびつな貿易上のアンバランスがずっと続いているのが実情です。

中国の日本研究については量的に見て、研究者も研究機関も非常に膨大で、すそ野が広いと思います。とはいえまだ改善すべきところがあります。第一に歴史が浅いです。中国の日本研究は、そもそも建国以降始まったものです。当時は日本語の学科もなかったですし、専門の日本研究機関もなかった。80 年代になってそういうものが各地にぽつぽつと出始めて、本格的にそういった研究体制が整うのは 90 年代以降です。まだ十分な蓄積があるとは言えないでしょう。

第二に、文学、歴史、思想、人文系の研究者が多くて、政治、社会、経済については、まだまだ人材が豊富ではない。人文系の中でも語学系が多くて、語学の中でも研究よりは教育に携わってる専門家が多

い傾向があります。研究分野も、近代以降のものが多くて、古代とか前近代の研究者はあまりまだ多くないと言えると思います。

第三に、中国の業績評価制度ともかかわりますが、周囲の日本研究者を見ていて、短期型、速攻型研究、要するにすぐに研究成果を出して、論文を「核心雑誌」に発表できるというようなものが多い。理論化や体系化を目指す、息の長い研究はあまり多くないと思いますね。日本の場合は、例えば岩波書店の『古典文学大系』とか『近代思想体系』とか、みすず書房の『現代史資料』とか、ああいう資料集や叢書は、関わった研究者の名前は目立ちませんが出版の意義は非常に大きい。それは一種のストックとして後代まで関係者、研究者、学生さんが使えるツールになります。そういった資料叢書系のものに、中国の日本研究においてはほとんどリソースが振り分けられてないんです。だから日本の『古典文学大系』のようなものを、百何巻もありますので全てとはいいいませんが、その中の一部を中国語に翻訳したものを叢書にするといったような取り組みがあれば、学術的な貢献は大きいと思いますが、短期的に業績にはならないので、人材がいきわたってない。

第四に、研究機関はたくさんあるんですが、研究「拠点」はないように見えます。みんなバラバラで、各大学研究機関相互の連携、連関性に乏しい。日本の場合は学会があって割と横断的にやっていますが、中国はそうになっていないようです。例えば北京大学一つとっても、何人も優れた日本研究者がいて、日本研究センターもあるんですけど、それはバーチャルなもので、やはり北京大学をすべて糾合するような拠点にはなり得てない。

一方、日本の研究者はそういった中国の研究をリサーチして、優れたものを取り込み、紹介するっていうような営為は継続されていないし、量的にも非常に少ないと思います。一方で欧米のもの、ドナルド・キーン、サイデンスデッカー、ライシャワー、ジョン・ダワー、そういったものは日本は進んで翻訳しているにもかかわらず、欧米の日本研究者と、東アジアの日本研究者に対するまなざしの落差があると思うんですね。

そもそも日本の国文学には、和文学と漢文学の二つの系統があります。そのうち漢文学は、もちろん中国の文学が日本に入ってきたものですが、これは国文学でもあるんですよ。漢文学っていうのは日本の知識人、文人だったら書けなければいけなかったわけですから。やはり中国の国学研究である中国文学研究や思想研究を、日本の研究者はもっと参照しなければならないと思いますね。ですから、ぜひとも中国の日本研究者の方々には、比較文化、比較文学の観点から積極的に日本の学界、出版業界に刺激を与えるような研究を引き続きやってほしいし、日本の編集者や研究者もそういった業績をちゃんと日本で紹介するような努力が必要だと思います。

同じようなことは歴史学でも言えます。東アジア文化交流史の観点から、日本の国史、日本史を書き換えるというようなことは必要だと思うんですね。それは確かになされてきてはいますが、問題は、近代史以降の問題で、やはりお互いの歴史観、あるいは歴史認識が相当ぶつかってしまう。ただ、例えば2006年から2009年に外務省が行った日中歴史共同研究がありましたし、2001年からは笹川平和財団の日中友好基金が支援した「日中若手歴史研究者会議」という共同研究があって、私も何本かそこに論文を書かせていただきました。やはりそこには近代史以降の日中間で中国は「侵略と抵抗」の枠組みで日本の軍国主義を断罪し批判する固い枠組みがありますので、共同研究とその成果物を出版することによって、知識人、読者界、読書人にいろいろな歴史観を紹介するような試みは必要でしょうね。

そういった意味で言うと、去年出された、華東師範大学の李永晶先生の『分身』、私は朝日新聞にこの書評を書きました^{xii}。こういったものは日本でも注目されてもいいと思うんです。日本と中国はそれぞれ切っても切り離せない分身、一つの体、表と裏の関係だという設定で、戦前と戦後を連続で見ようという、非常に面白い精神史なんです。こういう試みが中国でも書かれています。ただこの本も限界があります。日本の戦後史には、丸山真男の絶対的な存在があるし、竹内好も孫歌さんが紹介することによってかなり浸透してきたんですけど、彼ら進歩的知識人の思想と同時に保守的な思想もあるんですよ。保守的な思想については、ほとんど中国の日本研究者には注目されてないです。彼らの翻訳もろくにありませんので。しかし日本の戦後思想を考えるうえで、保守思想は非常に重要なんですよ。あと、民衆の思想ですね。例えば石牟礼道子の『苦海浄土』という素晴らしい、水俣病を扱った小説があります。中国で翻訳は出ていますが、あれはやっぱり民衆史の枠組みの中でしか読み解けないテキストなんです。ああいう、民衆へのまなざし、日本の戦後デモクラシーっていうのはもちろんアメリカに押し付けられた部分もあるけれども、それまで声をあげられなかった人たちが一人の人間として同じように自己主張ができるようになったっていうような戦後精神の中でこそ生まれてきたのです。戦後思想は日本でもまだ十分に通史として書き込まれてないので、限界もあるんですけど、まだまだやっぱりお互いに開拓すべき分野はあると思うんですよ。その意味でもやっぱり共同研究とか出版が双方で活発になされることによって、今のいびつな形を是正する、対等な知識交流をすべきだという風に思いますね。

(2) 今後への期待/对今后的期待

中国の日本研究の裾野は広がっていて、いろいろな研究がなされています。その中で二つ注目しています。一つは日本の大衆文化研究です。私の学生たちに、「なぜ日本語を勉強してるんですか」って聞いた時に、まず出てくるのは「アニメ」、「ドラマ」、それから「ライトノベル」ですね。彼らは私なんかよりよく知ってます。ただ、彼らのまなざしはやっぱり「マニア」、「愛好者」なんです。ですから漫画一つとっても、日本の戦後漫画っていうものをほとんど見てない。彼らにとって漫画っていうのは、幼少期から翻訳で親しめるようになった 90 年代以降のものなんです。だけど、日本の戦後漫画は、手塚治虫さんが切り開いたように非常に長い歴史といろいろなジャンルがあります。そこらへんはやはりしっかりと、研究のまなざしで取り組む必要があると思いますね。

もう一つは社会問題です。高齢化とか、少子化問題とか、貧富の格差問題とか、中国が直面している問題、あるいはこれから直面しようとする問題は、日本がすでに経験してきたことなんです。そこでの知見も——もちろん失敗の経験が多いんだけど——日本にはあるんですね。なぜそういった問題が共通に起こるかという、背景が似てるからです。社会背景だけでなく価値観においても、同じ東アジア、東方文明に生きる者同士の、例えば家族に対するまなざしとかコミュニティに対する考え方とか、共通点があるんですね。ですからやっぱりそこにおいても、中国にとって日本は「忘れ得ぬ他者」なんです。そういう意味では、日本が現在直面している、また、してきた問題をしっかりと分析して中国に紹介する研究に注目していきたいと思っています。

日本を忘れてもらっては困る、これだけ参照価値が高いんだ、そして思想資源を僕は持っているんだということをしっかりとアピールすることが大切です。最もわかりやすいものは、なんといっても著作物です。例えば『日本古典文学大系』のようなものは、やっぱりものすごい思想資源ですよ。ただ、そこ

に関わってるのはほとんど外の目を知らない日本の国文学者です。だけど外の目から、彼らが残してきた素晴らしいテキストを研究することによって、新しい発想がそこに生まれてくる。その資源は有形の出版物として確固としてそこにあるんですよ。それにちゃんと目を向けてほしい。そのためには、翻訳者とか紹介者とかの人材の他、いろんな製作上のコストもかかるでしょうけど、そういったところで国際交流基金さんにはぜひ引き続き頑張っていただきたい。

例えば、国会図書館は、明治から現代までデジタル化したコンテンツを何百万点も持っているわけです。このうち約 184 万点が今年（2022 年）の 5 月からインターネットを通したサービスで読めるようになるんですね。ただしそのサービスは国外在住の人は受けられない。これまで中国の日本専門家たちは、夏休み、冬休みになるっていうと日本に行って国会図書館にこもるんです。それで必要な文献をひたすらコピーするっていう地道な作業をしてきました。中国のどこかの公的図書館が、例えば国家図書館が国会図書館との間で提携をして、国会図書館のデジタル化したコンテンツが見られるようになれば、それをしなくて済むようになるんです。だれでも、中国の日本研究者だけではなくて、日本に関心を持ってる人がアクセスできるようになるような知的インフラをちゃんと整備することによって、中国にとってやっぱり日本の思想資源、学術資源は必要ということがアピールできますし、まさに中国にとって日本は「分身」だということに気づかせてくれるでしょう。そういうお仕事を引き続きしていただきたいと思います。

公開：2023 年 4 月 13 日

複製・編集を禁じます

- i 本多勝一『中国の旅』朝日新聞社、1972 年
- ii 金観涛・劉青峰著、若林正丈・村田雄二郎訳『中国社会の超安定システム——「大一統」のメカニズム』研文出版、1987 年
- iii 李沢厚著、坂元ひろ子・佐藤豊・砂山幸雄訳『中国の文化心理構造』平凡社、1989 年
- iv 嚴安生『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡』岩波書店、1991 年
- v 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、1960 年
- vi 張競『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店、1995 年
- vii 劉岸偉『小泉八雲と近代中国』岩波書店、2004 年
- viii 「マルクスからみたグローバリズム」、『世界』1999 年 4 月号
- ix 「近代天皇制——タブーの構図」、『世界』1999 年 11 月号
- x 溝口雄三『中国思想のエッセンス I、II』岩波出版社、2011 年
- xi 国立研究開発法人科学技術振興機構、中国総合研究交流センター編『中国の日本研究』（同機関の報告書）2016 年、101, 107, 148, 161 頁
- xii 馬場公彦「歴史の亡霊 再び舞台に（Bestsellers in Beijing）」『朝日新聞』globe、2020 年 12 月 6 日